

事 項	保温資材利用によるねぎの収穫前進効果		
ね ら い	ねぎ定植後の低温期における保温資材として、農ポリまたは不織布を利用した被覆栽培を検討した結果、生育促進効果が認められたので参考に供する。		
指 導 参 考 内 容	<p>1 保温資材 ねぎ定植後の保温資材として農ポリまたは不織布を利用することにより収穫期の前進が図られる。</p> <p>2 保温資材の使用方法 (1) 農ポリは、小型トンネルの被覆資材として利用する。 厚さ0.03mm、幅150～180cm程度のものを使用する。 トンネル支柱は、支柱長125cm、太さ11mm程度のものを約1m間隔にさして使用する。 (2) 不織布は、植え溝の上にべたがけして利用する。 透光性の高い長繊維不織布（パスライト等）または割繊維不織布（タフベル等）を使用する。</p> <p>3 保温期間 定植後から1ヶ月程度を目安に行う。</p> <p>4 収穫前進効果 屏風山地域では、4月上旬定植で、7月下旬からの収穫が可能になる。</p>		
期待される効果	露地ねぎの作期拡大につながる。		
利用上の注意事項	<p>1 強風等で被覆がはがれた場合には、速やかに補修する。</p> <p>2 農ポリ小型トンネルでは、気温の上昇にあわせて換気口を開ける必要がある。</p> <p>3 農ポリ小型トンネルでは、溝底の土壌が乾燥する傾向があるので、適宜かん水する。不織布べたがけは、溝底土壌の乾燥が少ない。</p>		
担 当	青森県農業試験場 砂丘分場	対 象 地 域	県下全域
発 表 文 献 等	平成8・9年度 青森県農業試験場試験成績概要集		

【根拠となった主要な試験結果】

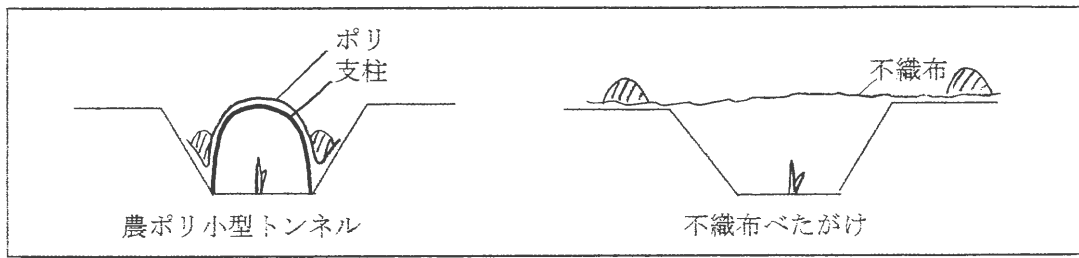


図1 被覆方法

表1 除覆直後の生育 (平成8・9年 青森農試砂丘分場)

年度	被覆資材	被覆形態	草丈 (cm)	葉数 (枚)	葉鞘径 (mm)	生育のそろい
8	農ポリ	小型トンネル	44.8	3.0	6.3	4
	不織布	べたがけ	33.9	2.7	5.4	4
	なし	無被覆	22.7	2.3	4.4	4
9	農ポリ	小型トンネル	32.0	3.0	4.7	4
	不織布	べたがけ	31.9	3.0	6.3	4
	なし	無被覆	26.0	2.6	5.2	2

注) 生育のそろい：良い：5～悪い：1の5段階評価

耕種概要

品 種 元蔵  
 播 種 期 平成8年度：平成8年3月7日  
 平成9年度：平成8年11月14日  
 定 植 期 平成8年度：平成8年4月22日  
 平成9年度：平成9年4月10日  
 被覆期間 平成8年度：平成8年4月22日  
 から5月31日  
 平成9年度：平成9年4月10日  
 から5月13日  
 収 穫 日 平成9年度：平成9年7月27日  
 (各区同時期収穫)

表2 収穫期の生育

(平成9年 青森農試砂丘分場)

被覆資材	被覆形態	全長 (cm)	葉数 (枚)	全重 (g/本)	葉鞘長 (cm)	軟白長 (cm)	軟白径 (mm)	調整重 (g/本)
農ポリ	小型トンネル	94.6	5.8	114	31.9	27.5	16.9	98
不織布	べたがけ	93.1	5.2	200	33.1	30.3	17.8	101
なし	無被覆	85.0	7.2	229	28.7	25.5	17.7	128

表2のつづき

被覆資材	被覆形態	1m本数 (本)	調整収量 (kg/a)	規格別本数割合 (%)			
				2L	L	M	S
農ポリ	小型トンネル	45	443	0	90	10	0
不織布	べたがけ	39	395	5	90	5	0
なし	無被覆	17	218	29	53	18	0

表3 被覆資材の違いによる特徴

(平成8年 青森農試砂丘分場)

被覆資材	被覆形態	乾 燥	耐風性	作 業 性 (備考)
農ポリ	小型トンネル	中	強	やや悪い(トンネル裾への土かけ)
不織布	べたがけ	少	やや強	良い

試験条件：平成8年4月22日～5月31日、総降水量130mm、最大風速12m/s、5m/s以上31回

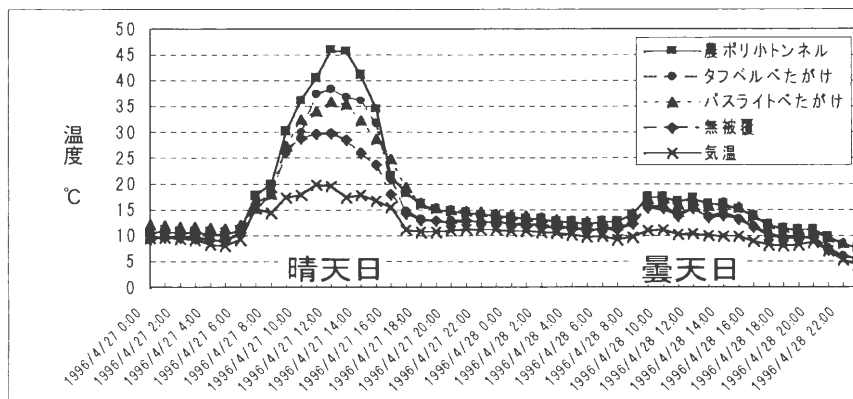


図2 溝底の温度 (平成8年 青森農試砂丘分場)